必要なもの

雨妣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
必要なもの

【Ｎコード】
Ｎ３８９３Ａ

【作者名】
雨妣

【あらすじ】
毎日の生活に価値を見つけることができない主人公が、生きているなかで「存在する意味」を探す物語。

プロローグ

薄暗い空間。

しばらく目を開けていたせいか、

段々と周りが見えてくる。

窓から微かに入り込んでくる電灯の光が私のカーテンを照らす。

眠れない。

目を閉じると、瞼の裏に何かが張り付いているような感覚に襲われる。

ここ最近、何をしていても無気力だ。

考える事すら面倒で、全ての物に対する興味や関心を全く感じない。

でも何故か、今涙が流れている。

何も感じないはずなのに、

目から生温かい液体が頬を伝っている。

疲れた。

億劫だ。

他は何も感じない。

目の回りは熱いのに、手先は冷えきっていた。

喉が渇いてきて、ベッドから起き上がり

ティッシュで涙を拭きとった。

音をたてないよう台所に行き、コップに水を入れ、

再びに部屋に戻り一口水を飲んだ。

一気に何もかも気力を失い、

テーブルの上に無造作に置いてある

睡眠薬を取り、水と一緒に飲み込んだ。

布団を首元まで引っ張り、ゆっくりと目をつぶると

さっきまでの瞼の裏にあった物は消え、

黒い布が覆いかぶさるようにして、

ようやく私は眠りについた。

第二話：目覚め

目を覚ますともう朝だった。

薬に感謝して、洗面所へと向かう。

鏡を見ると、予想どうり目の下に濃い影ができていた。

そんなことは無視する。

蛇口を捻ると勢いよく水が流れ出す。

透き通る水を掬いとって顔を洗い、

素早くタオルで滴る水分を拭き取った。

軽くついた寝癖をくしで直し、リビングに向かう。

親とあいさつを交わし、椅子に座る。

何も喋らないまま朝食を食べ終え、

足早に洗面所へ歯を磨きにいく。

時計を確認すると、いつも家を出る時間が来ていた。

急ぐでもなく、私は鞄を持ち腕時計をして家を出た。

近所のバス停まで歩いて、まだ肌寒い夏の朝を肌に感じながら

バスを待っていた。

妙に心地のよい排気ガスの音と共にバスはいつも通り、

時刻表の時間よりも数分遅れてやってきた。

バスの中には、顔見知りの数人の学生と二人の老人が乗っている。

お気に入りの後ろから二番目の席が空いているのを確かめると

ホッとして、歩いて固いクッションに座る。

この席は中学校に入学して初めてこのバスに乗った時に座った場所で、

地元の友達が進む高校とは違う

少し離れた学校に進んだ私には知り合いもおらず、

小さな緊張と期待を感じていた。

桜はもう地面に舞い散り、道路の端にゴミのように集められていた。

それを見た私は少し胸が痛んだが、結局何もすることもなく

窓の外を眺め続けているだけだった。

そんなことを思い出していると、いつの間にか学校前のバス停に着いていた。

定期を見せてバスから降りた。

学校に入って靴を履き変えて教室に向かう。

中では昨日と変わることのない光景で、男女の喋り声が響いている。

席につくと大程一緒にいる友達が私を見つけて、

「おはよう」と声を掛けてくれたので返事をした。

間もなく担任が入ってきてＨＲが始まった。

皆ぞろぞろと自分の席につき始める。

担任の話を所々聞きながら外を見ると、

もう太陽が昇っていた。

第三話：放課後

あっという間に授業が終わって放課になった。

いつも通り友達と買い物に行った。

何も買わずに、ファミレスに入って学校の話の後、

珍しく恋愛の話になった。

友達と私を含めた3人には彼氏は居なかったし、

あんまりそういう話はしなかったから、意外だなあと感じていた。

友達は学校の先生が好きになったと話した。

それから話は段々変わって、私の恋愛についての話になっていた。

私は笑って、

「そんなのいるわけないじゃん」

と言ったけど、二人は少し疑っていた。

でも気の多い彼女達は、

すぐにそんな話題なかった事のように
そこからどんどん話はそれていった。

ふと窓の外を見ると、
もう真っ暗だったので帰ろうということになった。
私は逆方向なのでファミレスを出てすぐ二人と別れた。
近くのバス停についてベンチに座ろうとしたら、
先客の男の人が居て、しょうがなく立っていた。
するとベンチに座っていた人は気配を感じとったのか、
私のほうを振り返った。
その人と私は目が合ったが見知らぬ人だったので軽く会釈だけして、
私は目をそらした。
相手は私の事を少しの間凝視していたようだけど、
バスが思ったより早く来てその人と私はバスに乗り込んだ。
バスにのっている間も

さっきの男の人が妙に頭に引っ掛かって、
斜め前に座っている彼を盗み見ると
やっとその理由が分かった。
私の学校の制服だったのだ。
生徒はたくさんいるし
私も余り人の顔を覚えるのは得意ではないので、
まあ有りがちな事だなと思った。

窓越しに再び外を見ると、さっきよりも空は濃く深い色になっていた。

第三話：放課後（後書き）

だんだんストーリーがこんがらがってきました（汗）

見捨てないでやってくださいｗ

第四話：家族

バスは道が混んだ事もあって、

いつもより少しだけ時間を費やしてバス停に到着した。

近くにある家に着いた時にはもう、８時前だった。

車庫には久しぶりに父の車があって驚いた。

家に帰ってリビングに入ると

母はテレビを見ていて，父はご飯を食べていた。

「ただいま」と言うと、

「おかえり」と返ってきたけど二人共私の方を見ていない。

「友達と食べて来たから」と言い残して、自分の部屋に向かう。

ベッドに倒れ込んでぼーっとしていたら、

ふとさっきの友達との会話が頭に浮かんだ。

どうしてあの子は自分の好きな人を私達に教えたりしたんだろう。

どうして私の好きな人を知りたがるんだろう。

どうして私は自分の好きな人を他人に教えなければならないのだろう。

私はずっと世間一般的な物の見方に違和感を感じていた。

どうして皆そんなに必死に「恋」を欲しがるのだろう。

どんなに考えても分からなかった。

ずっと中学でも「恋」なんてものを経験したこともなくて、

今現在でも周囲の男子に目がいかない私には―。

考え事のおかげか、いつの間にか眠っていた。

目が覚めて部屋の時計を確認すると夜中の3時過ぎだった。

よく寝た私は、風呂場に向かった。

浴槽を見ると、当然のように湯は抜かれていて

もう一度入れ直すのも面倒だったのでシャワーを浴びた。

風呂から上がって、音楽を聞きながら宿題をやっていた。

分からないところが数ヶ所出て来て、

色々と調べているともう6時半を過ぎていた。

眠気覚ましに飲み物をと思い、リビングに行くと

母はまだ寝ているようで、

父がインスタントコーヒーと食パンでニュースを見ていた。

テレビの音のせいか父が私がいる事に気付いている様子はなかったので、

「おはよう」

と声をかけると父は驚いたようにこっちを見た。

でもまたすぐに目を逸らした。

一久しぶりだった。

父の顔を正面から見たのも…

目が合ったのも…。

いつも口先だけの会話をする私達家族は、

お互いを見たり目を合わせたりすることをあえて避けているようだった。

いつから始まったことこそ覚えていないが、

少なくとも幼稚園に通っていた頃は

両親二人で毎日のように迎えに来ていたから

その頃はまだ「普通」だったというわけだ。

ずっと思い当たるふしを探していたら、

お祖父ちゃんの顔が浮かんできた。

そうだ。お祖父ちゃんが居なくなってからだ。

うちも親戚達も気まずくなったのは…。

第四話：家族（後書き）

これからも、よろしくお願いします。

第五話：失感

お祖父ちゃんが死んだのは小学校低学年の頃だった。
いつも両親が喧嘩をすると
すぐに来て二人をなだめてくれたし、
週末はいつもうちに来ていた。
お祖父ちゃんは、明るくて厳しくて、
それからうんと優しい人だった。

私が宿題もせずテレビを見ていたら叱って、
ちゃんと勉強もするようにと言ってくれた。
昔、叱ってばかりのお祖父ちゃんを私は嫌がるときもあった。

ある日私が朝目覚めると父と母は珍しく起きていて、
二人は何か真剣に話をしていた。
私がリビングのドアから様子を伺っているのに気付いた母が

「どうしたの。そんなところでいないで早く入ってきなさい」

と言って私の手を引っ張った。

すると二人は

お祖父ちゃんが昨日の夜遅くに倒れて、病院に運ばれたが手遅れだった。

と当時まだ幼い私に出来るだけ解りやすく教えた。

私は信じられなかった。

一でもその日に病院で白い布を掛けられたお祖父ちゃんを見て理解した。

もう、お祖父ちゃんはいないのだと。

どうして…。

お祖父ちゃん、前みたいに叱ってよ。

お祖父ちゃんはうちの家族からも、他の親戚達にも慕われていた。

私はそのことを葬儀の時に知った。

たくさんの人が来ていた。そして声も出さずに泣いていた。

私は泣けなかった。

ショックが大き過ぎて。

泣く余裕なんて無かった。

それから、いとも簡単にお祖父ちゃんを中心として

回っていた家族や親戚達の関係は崩れた。

―お祖父ちゃん…。

私の頭の中のお祖父ちゃんはもう顔がぼやけて見えるよ。

声もかすれて聞こえるよ。

もうすぐ思い出せなくなるのかな。

まだ忘れたくない。

忘れたくないよ…。

そう思うと涙が出て来た。

久しぶりの理由の分かる涙だった。

父もいるこのリビングで泣きたくなかった私は

黙ってまた自分の部屋に戻った。

思い出なんて嫌いだ。

苦しくなるだけだから。

何かに執着するのは嫌だ。

それを失ったとき、辛くなる。

私はお祖父ちゃんが死んでから、
家族や友達に対してでさえ必要以上に関わることをしなくなった。
もう、苦しみたくなかった。
今のうちの家庭環境をどうこうしようと
考えているわけでもないので、
もう考えるのをやめて制服に着替える事にした。
そしていつもの様に洗面所で洗顔してくしで髪をとかした。
再びリビングにいくと、もう母が起きていた。
そして朝食を食べ終えて、歯を磨いて家を出た。

第五話：失感（後書き）

また、微妙な話になってしまいました。
でも、よろしくお願いします。

第六話：散歩

バスはいつも通りの時間にやってきて、

私もいつも通り、後ろから二番目の席に座った。

殆ど寝ていなかったのでバスの中でうとうとしていると

すぐに学校に着いてしまった。

ふらふらしながら教室に向かっている途中、友達に会ったので話をした。

気が付くといつの間にか席に座っていた。

今日は妙にだるくて、気力がなかった。

本当にずっとぼーっとしていた。

帰りは友達の誘いを断って、学校から少し離れた河川敷を一人で歩いていた。

ここにはたまに来る。

静かで、川に写る大きな夕焼けが気に入っていた。

しばらく歩いていると、仔犬とは呼ぶに足らないが

あまり大きくもない犬がとぼとぼ歩いていた。

私は動物は嫌いではなかったが、母が苦手だったので

昔からあまり触れ合う機会がなかった。

でもその犬にはどこと無く自分と似た雰囲気があって、

私は知らぬまにその犬に駆け寄っていた。

すると、その犬は人懐こそうな顔で私を見上げた。

茶色い毛に垂れ耳の犬だった。

犬に初めて触れる私は恐る恐る頭を撫でた。

犬があんまり嬉しそうに尻尾を振るので、

私は河川敷の草の上に座って犬と遊んでいた。

犬には首輪もなく少しやせていたので、野良犬なんだなと思った。

でも私がためしに「おすわり」と言うと、

喜んでその場にすわった。

私はその時直感した。この犬はきっと前に大事に飼われていたのだと。

その日、名残惜しそうに私を見つめる犬を置いて、家に帰った。

それからも犬の事が気になり、

ちょくちょく河川敷に来ては犬と遊ぶようになった。

犬はなぜか、たまにいないときもあって

私は犬がいない時はがっかりして、早めに家に帰った。

名前は勝手に『チョコ』とつけた。

もちろん単純に毛が茶色っぽいからである。

少し前のよく晴れた日だった。

私がいつものように『チョコ』と呼ぶと、

どこからともなくチョコがやってきた。

頭を撫でていると、チョコの後ろに人影が見えた。

夕暮れどきで顔がよく見えなかった。

相手は私が目を細めているうちに近くまできていて

『どうも。』

と会釈をした。

ようやく顔が見えたと思ったら、見覚えがある人だった。

第六話：散歩（後書き）

これからも、よろしくお願いします。

第七話：再会

この前バスで見掛けた男子だった。

なんでこんな所にこの人が…。

ここにいるときは学校の人となんか会いたくなかったな…。

と少し残念に思った。

目の前で犬と仲良くじゃれている人を見つめながら、

最近友達と一緒にいることが、段々少なくなっている事に気がついた。

何日か前まで、ほとんど毎日放課後の予定を聞いてくれたり

誘ってくれたりしていた友達だが、

いつのまにかそのことすら無くなって今は挨拶を交わすだけの仲になっていた。

以前にも何度かそういうことはあったから、

そんなに大きなショックはなかったが、

一人でいるとゆうことに未だ慣れられないでいたのも事実だった。

というか、私に『友達』とゆう肩書に該当する人物なんて本当にいるのだろうか。

今私が考えていることは悲しいことなのだろうか。

ただ友達と楽しく騒いでいる人が羨ましいだけなのか。

自分でもよくわからなかった。

すると、ふいに目の前の人に声をかけられた。

『あのさ。いつまで、そうやってずっと黙ってるつもり？』

とチョコの頭を撫でながら私のほうを凝視する。

なんなんだ。いきなり…本当に突拍子のない人だな。と思いながら

『え、あぁ。ごめんなさい』

と曖昧に返事をする。

少しの沈黙が流れる。

いつまでたっても自分から話題を持ち出さない私に

『まあいいや。で、まずあなたの名前を教えてくれます?』と

目の前の人。

今度は何…。人が安らごうとしているのに横から邪魔するの

はやめてほしい。

『崎田といいます。　あなたは?』

と笑顔でいつもの社交辞令。

『月本。学校同じだよね。　てか、なんで崎田さんがここにいるのさ。』

なぜこんなに馴れ馴れしいんだろうこの人は…。

話してるだけで疲れてくる。

『別になんの用もないです。ただここの景色とその犬…チョコが好きだから。

というかあなたこそなんで、ここにいるんですか』

わざと怪訝な目つきで月本を見る。

『ふーん、コイツのことチョコって呼んでるのか。

じゃあ俺もこれからそう呼ぶことにするよ。

俺はこの近くに住んでるから、学校の行き帰りにたまにコイツの様子を見に来てるんだ。

コイツは何ヶ月か前にいきなりここにいて、その頃から今まで体の大きさが

ずっと変わってないない。ちょっとおかしいよな』

鈍感なうえに、どんどん話かけてくる名瀬にあきれながら

『チョコの説明ありがとう。大きさが変わらないって…病気とかじゃないんですか。』

仕方なく会話を続ける。

『でも、飯はちゃんと食ってるし、いたって元気そうだろ。

崎田さんは、これまでチョコが体調悪そうなときって見たことあるか？』

『そういわれてみれば…。　元気なチョコしか見たことないです。』

『だろ。だからきっと心配はないさ。』と自信たっぷりに言う。

つい私も『そう…ですよね。』と彼に納得してしまう。

話題が無くなってしまい、チョコも月本にかまってもらって満足そうだったのでここにいる必要もなくなり、いつもより早めに帰ることにした。

月本には『さようなら。』

とだけ言って家へと歩いた。

歩きながら河川敷のほうを振り返ると

赤く燃えるような太陽がゆっくりと沈んでいた。

第七話：再会（後書き）

ずいぶん更新が遅れてしまってすいません。少しずつ更新していくので、見捨てないで下さい。

第八話：必要

家に帰ると今日も父はまだ帰っておらず、

母は自室にいるようだった。

一人で夕食を適当に作って食べ、早めにお風呂に入った。

湯冷めしないように自分の部屋に戻って髪を乾かしたあとで

テレビをつけると見たことの無い旅番組が放送されていた。

ゆったりとした雰囲気の番組で、ベッドに寝転がりながら見ているとすぐに眠くなった。

ふと、チョコと出会ってからはよく眠れるようになったなと思う。

友達が離れていっても、私に擦り寄り尻尾を振ってくれるチョコがいる。

そう思うだけで私は元気になれた。

チョコは私の中で、もう必要不可欠な存在になっていた。

また明日も用事がなければチョコに逢いにいこうと思いながら私は目を閉じた。

一半ば寝ているような状態で、ご飯を食べて家を出た。

急いでバス停まで走るとすぐにバスがやってきたので、安心した。

学校でも眠くてよく覚えてないが、

友達はまだ普通に挨拶や多少の話題は持ち掛けてくれていることがわかった。

といっても、態度はよそよそしいが。

放課後は当然のごとく友達からの誘いもなく、予定通りチョコに逢いに行った。

チョコは草むらの中で寝転がっていて、私もなんとなく同じように寝転がった。

柔らかい草の感触を肌に感じながら私はいつのまにか寝ていた。

冷えてきた風に吹かれ、目を覚ました。

横にいたはずのチョコはいなくなり、もう夕日も沈んでいた。

チョコを探して歩き回っていたら川辺のほうで、

誰からもらったのかご飯の残りものを食べているのを見つけた。

―誰が…。

チョコは痩せていないし元気そうなので

誰かが餌をやっているんだろうなぁと薄々思っていたが。

あ。でも、近所の人とか…。

月本かもしれない。

まあチョコが不自由なく残りものだとしても何か食べていることが分かって安心した。

もう暗かったが、家に帰る気が起きなかったので

ご飯を食べ終えたチョコを呼び、頭を撫でたり一緒に並んで河川敷を歩いた。

空は群青色に染まり、さすがに寒くなってきたので帰ることにした。

家につくと父も母もリビングにいるようだった。

出来るだけ静かに自分の部屋に戻って音楽をかけた。

なぜか音楽を聞いても、気分はのらず、気分転換にお風呂に入った。

それでも駄目だった。

なぜか心に小さな穴があって、そこからすき間風が入ってきているみたいだった。

さっき見たばかりなのに、今とてもチョコに会いたい気分だった。

チョコをもっと可愛いがってやりたいと思った。

家に連れてきたいとまで思った。

私はある考えを胸に秘めて、勉強を始めた。

第八話：必要（後書き）

読んでくださり、本当にありがとうございました。
まだ、少し長くなりそうです。
お付き合いよろしくお願いします。

第九話：居残り

昨晩，学校の予習を終え心地よく寝床についた私は
気分よく目覚め、朝食を食べていた。

今日は母の態度が妙に刺々しい。
よくあることだ。
また何かのストレスを私にぶつけているんだろうと思った。
火の粉が振りかる前にと、早めに家を出てバス停についた。
しばらく待つとバスはやって来て、
バスの中でもチョコに早く会いたいなあと思いながら、
季節の変わり目を予感させる
たくさんの深緑の葉を流れていく景色のなか見つめた。

学校でもチョコのことばかり考えていたせいか、
友達と話をしている時も上の空だった。

それでも何とか授業だけは、チョコのことは考えずに取り組んだ。

うちの親は勉強に関してだけはうるさいから、

一応やっておかないとまた面倒な事に成り兼ねない。

今日は学校の委員会活動で放課後居残りになったので、

仕方なくチョコに会いにいくのは延期になった。

というか交通委員会なんかで何をするっていうんだ。

一番暇そうだから選んだ委員会なのに。

先生の話によると、最近学生の交通事故が多発しているため

校内外にいくつか交通安全を呼び掛けるポスターを配置するらしい。

今日はそのポスター作りをするのが仕事で、

幾つかのグループにわけてするのだそう。

私は5班とゆう微妙な場所だが、

班員の皆さんはまじめにやるような方々のようで、

早く仕上げて早く帰ろうという意見に賛同した。

ポスターを作るためにも資料がいる、

というので私は図書室からいくつか関連の本などを集めることになった。

早くチョコに会いたいので

急いで図書室に向かっていると廊下でたまって話をしている集団があって、

通りにくいので足早に前を通ると後ろから肩をたたかれた。

何。怖い――。

振り向くと、月本がいて私は少し驚いた。

『何急いでんの??』と声をかけてくる。

今それどころじゃないのに！と思いながら

『委員会の仕事で図書室に…。今急いでるんで、また今度』

と告げて私は走りながら図書室に駆け込んだ。

あまり来ない図書室に戸惑いながら探していると、

ドアが開いて月本らしき人が立っていた。

『逃げることないでしょ。俺も手伝うよ』

意味がわからない。別に親切にしてくれなくていいのに。

というか、足手まといになるだけじゃないの。

とか失礼なことを考えながら

『ありがとう。じゃあ交通事故についての資料を探してくれますか』

と月本の方を見ず適当に答えた。

初めは、お互い黙って探していたが

しばらくすると月本が口を開いた。

『崎田さん。昨日あそこで寝てたでしょ。』

と少し笑いながらこちらの様子を伺う月本に、

別に何の反応も返さず

『ああ。見たんですか』と言う。

もう、このよく分からない人は相手にしないことに決めた。

『なんか凄く気持ち良さそうだったから、起こすのやめたんだ』

と相変わらずの鈍感さで話かけてくる。

『そう…。それは優しい気遣いありがとうございます』

嫌味をこめて言う。

『どういたしまして。……あ！！あった！』

いきなり奇声をあげる月本に近付くと［生活］の欄に交通事故の項目があった。

私は早く持って帰る為に何冊か本を取り、

『ありがとう月本君。じゃあ私は委員会に戻るね』

と無理矢理月本を連れて図書室の外に出る。

何も言わない月本に

『じゃあ。本当にありがとう。さよなら』

と一方的に言って再び廊下を走りながら委員会に戻った。

第九話：居残り（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。
良ければ、一言評価を残していただければ幸いです。
これからも、よろしくお願いします。

第十話：苛立ち

『すいません。遅くなってしまって』

ドアを乱暴に空ける音と私の荒い息遣いが静かな部屋のなかで響く。

ここまで静かになるとは思いもしなかった為、さすがに気恥ずかしくなった。

5班の机に駆け寄ると、何故か皆はいないし

ポスターは下書きまで完成していて、

私を図書室に行くよう言った先輩らしき人が一人で色を塗っているところだった。

その先輩に、

『あの…。資料持って来たんですが。』と控え目に聞く。

すると

『あぁ。ごめんね。なかなか帰って来ないから皆で適当に意見出し合って書いちゃった。

とゆうわけで色塗りは私一人でやるから、

申し訳ないけどその資料返してきてくれる？

他の子達には先に帰ってもらったから、資料返してそのまま帰っていいから。』

と半ば強引に帰らされてしまった。

仕方なく図書室に戻り、何にも使われることのなかった本を

元の位置に戻し終え帰り道を歩いている途中、

資料を捜すのに手間取った自分自身と、

こき使っておいて有無を言わせぬ態度で追い返した先輩に苛立ちを感じていた。

私はこのままだとチョコに会ってもストレスをぶつけてしまいそうで

行かないほうがいいと思い

久しぶりに、以前はよく使っていた停留所からバスに乗った。

何人かの同じ学校の生徒が一緒のバス内にいて、ざわざわと話をしていた。

イライラしていた私はその雑音にも腹をたてた。

今朝バスから見た木々も今見つめると、美しくもなんとも感じなかった。

その時、人間の心の醜さを感じた。

気分が良い時は、目に見えるもの全てを美しく感じ、

気分が悪い時には、色あせているようにさえ見えてくる。

自分だけかもしれない。こんな風に考えるのは。

それでも仕方ないと思えた。

自分は小さな人間だから。

すぐに怒り、喜び、悲しむ。

一時的な感情に流されて物事を考えしまうのだ。

でもチョコに会えないのは辛かった。

始めに比べ大きく膨れ上がっていた私の怒りも、

チョコと会えない淋しさには成す術もなくしぼんだ。

チョコ、会いたいよ…。

第十話：苛立ち（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
なかなか言いたいことが文章にできない自分がとても悔しいです。
感想残していただければ、励みになります。

第十一話：実行

毎日が足早に過ぎて、チョコと出会ってからもう二ヶ月が経とうとしていた。

チョコには、相変わらず会いに行っていたし月本とも学校で顔を合わせたら挨拶、

あの河川敷で会えば短い世間話をする程度の関係だった。

言うまでもないが友達関係もこれといって発展してないが、

まあ円滑に進んでいるといえそうだ。

私は前々から練っていた計画を実行しようとしていた。

我ながらとても単純な動機の上、幼稚な内容だったが。

今日は母も友達と出かけるらしいので帰りも遅く、

父はもちろん仕事という名目でなかなか帰ってこないだろう。

私はそのことを確認して

いつものようにチョコのいる場所に向かう。

最近は学校のお弁当の残りや、パンなどを持ってきてチョコにやるようになっていた。
チョコはいつでもお腹が空いているようで、私が何かを持ってくると喜んで食べた。

チョコは私の姿を確認すると尻尾を降って、近くまで迎えに来てくれた。
私はその度嬉しい気持ちでいっぱいになった。

そして私は…。

チョコを目一杯可愛がったあと、あらかじめ持ってきていたリードを
チョコの汚れた首輪に繋げた。
初めての感覚にチョコは不安そうだった。
まだ夕日は沈んでおらず、私はリードを持って歩き出した。
チョコもわけが分からない様子で、一応後ろからついてくる。

しばらく歩いて、さっきまで座っていた河川敷が少し離れたところまで来ると、

チョコはやっと理解したのか歩くのをやめてその場に座り込んだ。

『チョコどうしたの？もっと歩こうよ。』

そう。

私はチョコを家に連れて帰るつもりだった。

すぐに見つかるのは分かっていたし、両親に反対される事も目に見えていた。

でも、私はいつでもチョコに傍にいてもらいたかった。

独占欲が強くなっていたのだ。

それからもチョコは私が何を言っても、そこから動こうとしなかった。

チョコが再び歩き始める事を信じて私も近くに座った。

遠くから、

『チョコ…か？』とゆう声が聞こえた。

振り替えると、月本がいた。

月本に見られても別に何の害もないので、

私は普通に

『久しぶり。最近あんまり会わなかったね』

もう敬語は使わなくなっていた。

面倒だったし、この人にとって敬語だろうがため口だろうが、

そんなのは関係ないのだから。

『あぁ、部活でちょっと忙しくて。　…崎田さんはなんで、こんな所までチョコと一緒なの？

リードも繋いであるし…』

何故か自分が今行っている事が言葉にしにくかったので、何も言わなかった。

すると、いつもと様子が違うチョコを見て

『フッ。もしかして崎田さん…。チョコを家まで連れ帰るつもりだったりする？』

笑いを堪えながら私の顔を見る。

なんで笑うんだ。　馬鹿にされてるみたいで、少しムカッとした。

『そうですよ、あなたの言うとおり。悪い？』

不機嫌に答える私に

『ごめんごめん。そんな怒らないでよ』

と申し訳なさそうに言う。

『だってさ。あんまり崎田さんが、面白いから…』

『ほんと月本君て意味分からない。何が言いたいの？』

『はいはい。言いますから。そんな焦らせないで』

私は、黙って続きを促した。

第十一話：実行（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
また、微妙な感じになってしまいました（汗）。
一言感想を残して頂ければ幸いです。

第十二話：束縛

『前に見たことあるんだ。

まだ小学校低学年ぐらいの男の子が、

無理矢理チョコを引っ張って家に連れて帰ろうとしてるところ』

『え…』

『まあチョコは断固動かないし、その子は途中で泣きそうな顔して諦めて帰ったよ』

『ふぅん。それで、月本君は、私がその小学生と同レベルだと言いたいわけだ…』

また怒りに火が付きそうな私に、月本が急いで付け足す。

『違うって。ただ、今の状況が少しあの時の子に似てて、可愛いなあと思っただけ』

『そう。その割に長い説明ありがとう。』

こういう軽いお世辞の受け流し方がよく分からない私はいつも、

そっけなく返す。

『というか、多分誰もチョコを自分の家には連れて帰れないよ』

『なんで』

怒る寸前の私。

『きっとチョコは、俺や崎田さんや、他のいろんな人に会いに来てもらうことが好きなんだよ。

特定の誰かに飼われたらきっと今みたいにたくさんの人との関係はなくなってしまう。

だからまたいろんな人が来てくれるのを信じて、あそこから動かないんだよ。多分ね』

何となく納得のいく説明だった。

つまりチョコは、どれだけ懐いた人にでも決して着いて行かずに不特定多数との関わりを大切にするのだ。

私は少し自分が恥ずかしいと思った。

チョコのように、個人を特別視せずに生きることができないからだ。

私はいつだって、自分の気持ちばかりを優先している。

月本の説明で、チョコの首輪からリードを外して一言『ごめんね』と言った。

チョコは私からの束縛から逃れて、解放されたように河川敷のほうに走っていった。

もう、追い掛ける事もせず座ったまま、もう使うことのないリードを鞄のなかにしまう。

なんかチョコに悪い事をしてしまったな。

と罪悪感に襲われながら

『もう、前みたいには懐いてくれないかな…』と独り言の様に苦笑した。

まだ横にいる月本が、

『チョコは崎田さんが思ってるよりずっと慕ってるよ。見てたら分かる』

川辺を見つめながら言う。

私は黙っていた。　もう、疲れた。

計画していたことは呆気なく水の泡。　おまけに鈍感な人にま

で慰めてもらう始末。

しばらくお互いに何も言うことなく、同じ方向を向いていた。

夕日は沈んで、空が薄い水色に染まった頃。

月本が『あ、俺。チョコにエサ持ってきてたんだった。やってくるな』

『 あ。私もチョコの様子が気になるから付いてくよ』

途切れ途切れの会話の最中チョコを見つけた。

二人で駆け寄ると、尻尾を振りながらチョコがこちらを向いた。

月本が弁当の残りもの…だろうか。そんな感じのものをチョコの前に差し出した。

チョコは、今日はまだ何も食べていないはずなのに、

これまでに見たことのないような

ゆっくりとしたスピードで少しの焼き魚やおにぎりを食べた。

月本に 、『チョコって、いつもこんなゆっくり食べるっけ？』と聞いてみる。

『さぁ。俺、時間あるとき以外は餌だけ置いてすぐ帰るからな。

でも何か今日は少し遅いような…。』

まあ、チョコも動物だし体調が良くない時もあるだろうと

勝手に事故解決して、私と月本はそれぞれの家に帰った。

第十二話：束縛（後書き）

ありがとうございました。
これからもよろしくお願いします。

第十三話：驚き

空は薄暗く雲って、肌寒かった。

最近勉強が難しくなったのもあり、チョコに会いにいく回数は減っていた。

ようやく定期テストが終わって、勉強も一段落ついた私は

チョコに会いに行く前夜コンビニで犬用の缶詰を買った。

それも、ごくたまに財布がリッチなときにしか買わない贅沢な缶詰を。

チョコはどんな顔をするだろうか。　考えただけで、口元が緩んでしまう。

学校でも、チョコのおかげか明るく振る舞えるようになり、

私に距離をとっていたクラスメート達も少しずつフレンドリーになりつつある。

強がっても、一人でいることは辛かった。

テストが終わった直後なので皆少しだらけているように見える。

そんななかで私は放課後を待ち侘びていた。

掃除も、ホームルームも終わって皆が教室から出て行く。
人込みで溢れている廊下の中を私は、はや歩きでくぐり抜けた。
そのスピードはチョコを見つけるまで変わることはなく、
久しぶりに見たチョコは少しやつれているように見えた。そして横には月本がいた。
特に骨が浮き出ているとか、ガリガリに痩せているようではない。
最近餌をやってもらってないのかな、と心配したが、
今日はチョコのお気に入りのあの缶詰がある。
きっと元気になってくれるはず。　そう思ってチョコの傍に駆け寄る。
月本はなぜか私服だった。
『あぁ。崎田さんか。久しぶりだね』
こちらを見て普通な顔で言ってくる。
『どうも。てか月本君、なんで私服なの？』
久々だった為少し緊張してしまう。

『んー。今日熱があって学校休んだんだ』

『そうだったの』それなら私服にも納得がいく。

それ以上は何も言わずに、ごそごそと鞄から缶詰を出す。

『チョコ。チョコの大好きな缶詰だよ。食べな』と蓋を開けて差し出す。

「無理だよ…」

小さな囁きが聞こえた。

チョコを見ると、いつもなら喜んでがつがつ食べるのに、ほんの少しずつ食べているだけだった。

『チョコ？どうしたの？おいしくない？』

私が話しかけるように、チョコに言う。

するとチョコは、あろうことか缶詰を目の前に食べるのをやめてしまった。

『月本君。もしかして、さっき何かチョコにあげた？』

月本は黙っている。目を合わせようとしない。

もう一度『月本君？』と言うと、黙ったまま首を横に振った。

『なんで、チョコ食べないの？大好物の缶詰なのに…』

もはや、月本に言っているのか独り言なのかわからないように私は呟く。

月本が口を開く。

『崎田さんは知らないと思うけどチョコ、最近ほとんど何も食べないんだ』

『どういうこと？』意外な程に冷静な自分の声に驚いた。

『わからない…。でも、食欲だけじゃなく体の調子も良くないみたいだ』

思考が止まった。

私の目線の先には殆ど口が付けられていない缶詰がある。

『は…。病気ってこと？』

『だから、俺にもわからないって言ってるだろ！』

怒鳴るように月本に言われて、私はハッとする。

まずは、チョコを病院に連れていかなければ…。

でも近くにある動物病院なんて知らない。

もう家に帰って調べるしかなかった。

私は缶詰を置いたまま、何も言わずに鞄を持って走った。

第十三話：驚き（後書き）

ありがとうございました。
どうか見捨てないでやってください。

第十四話：心配

もう何時間パソコンに向かっているだろう…。

始めは動物病院を探していたのだが、チョコが心配でたまらないので

自分なりに、いろんなホームページを見てチョコがどんな病気なのか調べていたのだ。

途中で親が帰って来て、私に何か言っていたが適当にあしらった。

大体予想はつく。勉強のことだろう。

パソコンで犬の病気の資料を見ているうちに、たくさんの悪い予感がしてきた。

チョコの今の症状だけでは難病から薬で直せるものまで、たくさんの病気にあてはまるのだ。

どうか。どうか…。

神様なんて存在を信じたことはないけれど、

チョコの病気が出来るだけすぐ治るようなものであるように、

と心から願った。

目が乾いて痛くなっても、パソコンの画面を見続けた。
眠ろうかとも考えたけれど、チョコのことを思うと
目を閉じても悪い事ばかり浮かんできて、眠るなんてものじゃなかった。

あぁ。早く明日になって…。
チョコを一刻でも早く病院に連れて行きたい。
このままだと、私まで心配で心臓が潰れてしまいそうだった。

長時間私に使われているリビングのパソコンも、本体が熱くなり疲れているように見えた。

時計も見ていなかった私は、テレビの上にある掛け時計を見つめた。

もう4時だった。驚く間もなく、気が抜けてしまった私は
自分がこのパソコンと同じように疲れている事に気付いた。

倒れるようにソファに転がる。

目を閉じると、疲れに助けられてチョコの心配も忘れて寝ていた。

ん…。

私の名前を呼ぶ声で目を覚ました。

私の真正面に、母の顔がある。

『あ…。おはよう。』

リビングのソファから起き上がると、母にパソコンの電源が点きっぱなしだったと怒られた。

時計はバスの時間の１５分を指している。

急いで制服に着替えて身仕度をし、

チョコの病院の為にあるだけの金を財布に入れて朝食もとらずに家を出た。

バス停まで走っていると、道路を目的のものが通り過ぎていった。

初めてバスに置いて行かれたショックに私はしばらく立ち尽くしていたが、

家に帰る気も起きず、歩いてチョコのいる河川敷まで行くことにした。

これまで【学校から河川敷】の道順で行っていた私は多少迷いながらも、

どうにかチョコの居場所まで辿り着くことができた。

チョコは私を見て、驚いた顔も見せずにいつもどうり寄って来た。

あまり寝ていないのと、歩いてここまで来た疲れとで、草むらをベットに寝転がった。

ここから、学校が小さく見える。

勉強からの解放で私はまた眠気に襲われた。

まだ午前中だし、ゆっくりできると思い

私はそのまま眠気に体を委ねた。

気持ち悪いぐらいの空腹感に目を覚ます。

チョコを見ると、なぜかまた隣に月本がいた。

月本と目が合う。

『前にもこんな事あったね』

自然な問い掛け。

『ほんとに、起こしてくれたらいいのに…』

『はは。　あのさ、昨日は崎田さんに八つ当たりしちゃってごめんな』

『ん。こっちこそ』

何か話さないと恥ずかしい空気だったので、私から話を持ち出

す。

『昨日家に帰ってから近くの動物病院探したんだ。で、今日チョコを連れて行こうと思ってるの』

月本は少し考えているように間を空けて、

『いいと思う。でも制服は良くないと思うよ。さぼってるのがばれるかもしれないし』

『あぁ、そうか…』溜め息と一緒に私が言う。

『てか俺もついてってい？だったらうち近くにあるし、男もんだけど服貸すよ？』

『本当？じゃあお言葉に甘えて貸して貰おうかな』

チョコを置いて、月本の家まで歩いた。

月本の家はマンションで、しかも一人暮しのようだった。

部屋に入って適当に服を着替えて、制服は帰りまでここに置いてもらうことにした。

着替え終えて月本を呼ぶと『こっちに来て』と言われて、声のする方に向かうと月本がご飯を作っていた。

少しすると机にいくつかの料理が並べられた。

お腹をすかしていた私は心行くまで昼食を食べた。

『ありがとう。おいしかった』

月本もご飯を食べ終え、二人で家を出てまた河川敷へと向った。

空腹も満たされて準備万端な私達は、チョコを呼んで私の誘導のもと病院を目指して歩き出した。

第十四話：心配（後書き）

ありがとうございました。
もうそろそろラストスパートかと…。
これからもよろしくお願いいたします。

第十五話：告知

予想していた事態が起きた。

チョコがある程度歩くとあの時のようにその場に座りこんでしまったのだ。

私がどうしようか迷っていると、月本がチョコを後ろから抱き上げた。

チョコは嫌がって暴れようとしたが、

月本がちゃんとチョコを強く捕まえていたのでどうにか大丈夫だった。

私はチョコがいつ逃げるか分からないことが不安になり、急いで案内した。

病院は思った程遠くなく、１０分ぐらいで着いた。

昼過ぎなので客数も少なく、私達は速やかに診察を受けることができた。

獣医らしき人は、もうおじいさんでベテランの雰囲気をかもし出していた。

その獣医に、症状を聞かれたので［最近食欲もなく、元気がない］と話した。

獣医は続けて

『ドックフードはどんな種類を？』と言う。

今度は月本が『ドックフードはやっていません。ご飯の残り物をやっています』と答えた。

獣医は驚いた顔をしている。『君達、この犬が何の病気かわかったよ』

『え。チョコは何の病気なんですか？』私はつい大きい声を出してしまう。

獣医は言いにくそうに、

『推測でしか…ないんだが。腎臓病ではないかと。

今からいろんな検査をするから、まだわからないがね』

二人共言葉を失っていた。そんな二人を気にせず目の前の医師は続けた。

『君達はこの犬に残り物を与えていると言っていたね。

人間の食べ物は、犬にとっては塩分などが高すぎるんだ。

それが続くと、体に異常が出てくる。　そして何も食べれなくなってしまうんだ。

今からまず血液検査をするから、この犬を押さえてくれるかな』

そう言って獣医は注射器の針をチョコの足に刺した。

瞬間、チョコが『キャン』という悲鳴をあげた。

痛がるチョコを抱きしめて針が抜かれるのを待った。

横から月本が辛そうな顔でチョコを見ていた。

獣医は血液検査には少し時間がかかるから、と椅子にでも座って待っててくれと言った。

注射器の針が抜かれた所には、消毒液の染み込んだコットンが月本によって押さえられている。

「今度は何をされるの」というように怯えた表情をしているチョコの頭を優しく撫でた。

腎臓病…。この子がそんな病にさらされているなんて信じられない。

きっとあとで先生が訂正してくれるはず。

嫌な考えばかりが頭をよぎる。

早く、早く検査の結果を言って欲しかった。

月本はも何も言わない。私もこの状況では何を話せばいいか分からないかった。

永遠のように長く感じられた時間も、獣医の声によって消える。

チョコを月本が連れ、私も診察室に入った。

獣医は、私達に酷い事を告げた。

『腎臓病に間違いはないでしょう。

ですが…フィラリアと言う別の病気にもかかっているようです』

『…じゃあ二つもチョコは病気にかかっているんですか』私の掠れた声が響く。

『そういうことです。フィラリアは蚊に刺される事でかかる病気で、

夏場に蚊にさされた場所から幼虫が体の中で繁殖して犬の体を段々と蝕んでいくのです』

残酷な事をすらすらと述べる獣医に月本が半ば怒ったような声で

『で、その二つの病気はどうやったら治るんですか』

『フィラリアはまだ幼虫ならば薬の投与が可能ですが、

この犬の中には既に成虫がいます。腎臓病は、専用の食品はありますが…』

そんな事ものともせず、医者は言葉を並べてゆく。

『じゃあ、どうしたら…』

私の言葉には意志なんて無く、すぐに空気のなかに溶けてしまいそうなものだった。

『病気の進行を遅らせることなら点滴で可能です』

『その点滴はいくらぐらいかかるんですか』

必死で聞く私。

獣医が口にした金額は、今の私ではとてもたりないようなものだった。

顔を覗かせていた希望の光は呆気なく消えた。

ここに居ても何もならないので月本がチョコを連れて診察室を出た。

私も獣医に礼を告げ、会計を済まして二人と一匹で病院から出た。

第十五話：告知（後書き）

ありがとうございました。
これからもよろしくお願いします。

第十六話：無意味

どうにかチョコを連れて河川敷まで戻ってこれた。

でも私も月本もしばらく何も言わなかった。

目の前にいるこの愛らしい犬が［腎臓病とフィラリア］という重い病を

背負っているなんて考えられなかったし、信じたくなかった。

しかし何か始めなければならないことは事実だった。

『獣医さんが言っていた事を信じて、これからは塩辛そうなものとか残り物をやるのはやめよう。

私、残りのお金でドックフード買ってくるよ』

月本に同意を求めた。

『そうだな。んじゃドックフード、割り勘して買おうよ』

二人で少しだけチョコのことを話した。

そして、明日放課後一緒にドックフードを見に行くことになった。

まだ早い時間だったけど、二人共心に強い衝撃を受けているようだったので、

月本の家に制服を取りに行って自宅に帰った。

帰り道をふらふら歩いていると、いつかの公園が遠く離れた所に見えた。

春は淡いピンクの花びらを散らし

夏は青々と葉を生い茂らせていた木があるあの公園。

今は秋の紅葉に染まりつつあった。

その木を見た私は無性に腹が立ち、そこから走った。

自宅までの道のりで何人かの人々とすれ違った。

振り返ってないからよく分からないが、みんな私を凝視していたようだった。

逃げるように自宅に駆け込んだ私は靴を脱ぎ散らし、

誰もいない家で自室のドアを今にも壊しそうな勢いで閉めた。

おぼつかない足取りで、ベットに腰掛ける。

さっきの木を思い出す。

季節はこんなに美しくめぐっているのに、どうして私は…。

無気力になって布団の上から枕に頭をのせた。
悔しさとやりようのない悲しみで目頭が熱くなった。
目の端からまだ温かい液体が頬を流れていく。
私のこの全く無意味な涙が枕に濃い染みを作っていた。
窓から差し込む日の光に手を伸ばしてカーテンで遮る。
電気はついていない。
部屋の中は、カーテンを貫いてなお微かに漏れている光が
灰色っぽい空間を作り上げていた。

私の心の中でも何か黒いものが渦巻いているようだった。
目を閉じるなんて事はせずに、私は時折涙を流しつつ
焦点が定まらない目で天上を見つめていた。
母はいつの間にか帰ってきていたようで、夕飯の支度が出来たと
私に声をかけたが
返事がないことで大体を理解した様子だった。
もう誰とも顔を合わせたくなかった。

心を静めるので精一杯だった。

その晩、一睡もせずにじっと黙って無駄だと解っている涙を流し続けた。

水分を消耗し過ぎてか、起き上がると激しい頭痛に襲われた。

洗面所に行くと、久しぶりに見る自分のひどい顔に苦笑してしまった。

部屋に再び戻って自分専用の薬箱から頭痛薬を水無しで飲み込んだ。

制服のまま一夜を過ごしてしまったが、そのまま学校に行くわけにも行かず下着を着替えた。

リビングに一度も顔を出さずに早く家を出て、近くのコンビニでパンとジュースを買った。

バス停でさっき買った軽い朝食を食べ終え、しばらく後に来たバスに乗り込む。

学校では水を飲まなかったのがいけなかったのか、頭痛は一行に治らず鬱に近いような状態で、

せっかく馴染んだクラスメート達とも会話をしなかった。

約束どうり急ぐでもなく私はチョコの河川敷に行った。
月本も間もなくやってきて、私の肩をポンっと叩いた。
振り返ると珍しく月本が目を見開いて
『崎田さん…もしかして…体調悪いの』
『あぁ。ちょっとね。ごめん…』
『謝ることないよ。俺も昨日は不安で夜中何度も目を覚ました。
まあ、買い物に行こうか』
『…うん』
会話が進むことは無く、ただ黙々と近くのホームセンターまで
歩いた。

第十六話：無意味（後書き）

ありがとうございました。
むー。なかなか終わりません。
これからもよろしくお願いします。

第十七話：臆病

広い店内でやっとペット用品の場所を見つけた。

どんなドックフードがいいか迷った末、

食べやすいように柔らかく加工してあるものにした。

そして、1番小さいサイズを買った。

レジでは月本が会計をしてくれたので帰り道の途中ど半額返した。

会話も殆ど無かった為、早く河川敷に着いた。

私がチョコの頭を撫でていると月本が思い付いたように、

『ごめん、崎田。ちょっと待ってて』そういって走っていってしまった。

しばらくすると、月本が帰ってきた。

『はい、これ』

そういって手渡されたものはビニール袋で、中を見ればドックフードが入っている。

私がよくわからないと言った顔をしていると月本が付け足した。

『俺も来れない時があるかもしれないから、半分ずつに分けて持っといた方がいいかなと思って』

『そっか。わかったよ』

了解すると月本が自分のビニール袋を開けて

チョコの前に少しドックフードを蒔いた。

チョコは初めての食料を見て、匂いを嗅いだりと疑っているようだったが

月本が『食べてみな』と声をかけると、もぐもぐと食べ始めた。

その様子を見て私は心の中で安堵した。

「よかった」と。

もし、食べてくれなかったら…という恐怖があった。

チョコはゆっくりと、地面にあった少量のドックフードを食べ終えた。

『よかったね。食べてくれて』

『ほんとにな…。安心したよ』

緊張がほぐれて、お互いの口数も増えた事も嬉しかった。

チョコの体調が悪くなってからまともな会話が無かったから。

気分が良いまま、家に帰りたかった私は月本にさよならを告げた。

帰宅すると昼食を摂ってなかった事を思い出して、

リビングから調理パンを取って部屋に入った。

母がいつものように夕飯ができたと私を呼んだので、返事をして

リビングに向かった。

テーブルには父もいて、普段より少し豪華な料理が並んでいた。

食事中に父が「学校はどんな感じか」と聞いてきたので

『楽しいよ』と短く答えた。

勉強の話題が出る前にと、早く食べ終えて部屋に戻る。

入浴後、ベットに入ると昨日の涙で枕がまだ湿っていた。

今日はチョコがドックフードを食べてくれた事で充分だった。

音楽を流すと自然に瞼が重くなって眠っていた。

気持ちよく目覚めた私は朝食もちゃんと食べて、バスの時間に間に合うように家を出た。

学校でも気分よく過ごせてクラスメートとも会話が弾んだ。

放課後。

あらかじめ月本に渡されたドックフードを小分けして持ってきていた私は、

チョコのもとへ向かった。

ビニール袋から昨日より多めにドックフードをこぼしてチョコを呼んだ。

チョコはまるで亀のようなスピードでこちらにやってくる。

力が無くなってきているのがありありと伝わって来た。

辛そうなチョコを見ていられず近付いて、餌を口元まで持っていく。

が、チョコは食べてくれなかった。

私が何度も『よし』と言っても、私の顔をじっと見つめているだけだった。

数日後。

私は毎日ちゃんと眠ってご飯も食べている。

学校でも普通。機嫌がいいわけでも、悪いでもないように過ごした。

放課を告げるチャイムが鳴っても、

前のように走ってチョコに会いに行く事はなくなっていた。

チョコは餌を食べないし、みるみる痩せていった。

隣でいると、苦しそうな顔をして動悸を起こしているような時もあった。

どうして急いで会いに行かないのって、見てるだけで辛いから。

ちゃんと毎日餌は持っていく、でもチョコが食べる事なんてないから全然減らない。

小分けした時のまま。

そのドックフードの袋を見ただけで泣きそうになる。

月本とは昨日会ったけど、彼もチョコが何も食べなくなっているのを知っているようだった。

私はこうして無駄な程ゆっくり歩いて、チョコとの時間を短くしようとしている。

河川敷の横を歩きながら不吉に曇った空を見た。

もうチョコが見えてきている。

第十七話：臆病（後書き）

ありがとうございました。
これからも、よろしくお願いします。

第十八話：終息

チョコも私を見つけたようだったが、数日前のように駆け寄ってはくれなった。

もうチョコはそこから動けなくなっているようだった。

私を見つけると、「伏せ」の状態のまま尻尾を小さく振っていた。

私は定位置となってしまったチョコの隣でいつものように頭を撫でた。

――私はどうすればいいの。

このまま弱っていくチョコを見ている事しか出来ないの？

チョコに点滴をしてあげることもできない。　こんなふうにただ隣にいるだけ。

自分に嫌気がさして私はいつもより幾分早く家に帰る事にした。

立ち上がって歩き出す。チョコの方を振り返ると、不安げな目で私を見つめていた。

家に帰ってテレビを見ていた私は、屋根に当たるポツポツという音になかなか気付かなかった。

父が帰宅してリビングに来た時、服が濡れていたのを見て初めて理解した。

今雨が降っているのだと。

リビングの閉め切っていたカーテンを開けると外には水溜まりができていた。

ハッとして、私は父に「学校に大事なものを忘れてきた」と告げて、走った。

もちろん傘を右手に。

履きかけの靴は何度も脱げそうになり、傘は持っているだけで自分にさすのを忘れていた。

さほど強くない雨だったはずなのに、走っていると強く肌に当たった。

チョコを見つけた時には走り寄り、急いで傘をさした。

さっきの場所まま雨に濡れたチョコは悲しそうだった。

疲れきった表情をしたチョコは、苦しみに耐えているようだ

った。

時折聞こえてくる小さなうめき声が体の痛みを物語っていた。

『チョコ…』

雨の音ですぐに消え去ってしまった小さな声。

チョコはもう長くない。

そう直感した私は、月本を呼びに彼の家まで走った。

傘はチョコの上に立て掛けてある。

急がないと…。　私はまた走った。

長い距離を走り過ぎて、横腹がズキズキと痛んだ。

その痛みを殺すために、自分の腹を殴った。

すると少し前に傘をさしている月本が見えた。　月本が私に気付いて駆けてくる。

『月本、チョコが…ハァ…大変ッ』

横腹の痛みでちゃんと言葉が出てこなかった。

その一言で全てを理解したように、月本は傘を閉じて走り出した。

私もすぐ後を追う。

苦しい。　　息ができない…。

ようやくチョコのいる河川敷まで来ると月本の横に並ぶことが出来た。

ゆっくりと月本の後ろからチョコに近付く。

月本のひどく傷付いた横顔が見えた。

チョコは私達を見て、とても安心したような顔をした。

そしてあろうことか立ち上がって私達のもとまで歩こうとした。

でも立ち上がった瞬間、フラッとよろめいて倒れてしまった。

私達は目と鼻の先程の所にいるチョコまで走った。

チョコは私達が頭を撫でるともう残っている筈もない力の全て使って尻尾を動かした。

ほんの少しだけ。

でも私には伝わった。　チョコの［ありがとう］っていう気持ちが。

きっと、月本にも伝わったはずだ。

そして何度か苦しそうな呼吸を繰り返した後、静かに目を閉じた。

冷たい雨で冷え切っていた体は、みるみるうちに熱くなって私の目の端から液体をスッと流した。

ずっと体中に降り注いでいる雨と私の涙は混じって地面へと零れ落ちた。

とまらなかった。　涙も悲しみも。　月本もうつむいている。

私は目の前ですやすやと眠るように横たわっている犬を見つめた。

なんでそんな幸せそうな顔してるの。　私はもう、君と目を合わせる事もできないのに。

一人でそんな…どっかに行かないでよ。

放課後の時間はどうしたらいい？　一人で真っ直ぐ家に帰るなんて、もうできないよ。

心の中でチョコを責め立てた。

ふと月本が私に近寄ってきて　『俺…悪いけど家帰るな』

彼の顔も悲しみに染まっていた。私は何も言わず頷いた。

しばらく、未だ降り続いている雨に濡れながらもチョコを見つめていた。

チョコがまた何事もなかったかのように起き上がって私に寄り添ってくれる事を信じて。

自分の浅はかな願いに呆れて、自宅に戻った。　傘はチョコにさしたまま。

家に帰ると玄関の時計は9時過ぎを指していた。

冷えた体を温めに風呂に入って湯冷めしないようベットに潜り込んだ。

長い間雨に打たれていた為頭痛があった。

その頭痛と共に私も眠りについた。

第十八話：終息（後書き）

ありがとうございました。次が最終話になります。

第十九話：思い

―私はあの公園の前をゆっくりと歩いている。

チョコとの思い出のなかにもある木…。

花びらはまだ殆ど散っていない。遠目で見ると樹木全体がピンク色のようだ。

もう見えて来たよ。君といたあの場所が。

チョコが死んだ翌日、私は頭痛と精神的なショックとで学校を休んだ。

一日充分に休息をとった私は、次の日はちゃんと学校に　顔を出して授業を受けた。

帰りにチョコのいた場所に行こうか迷った末、足が勝手に河川敷に向かっていた。

少し遅れた為か、月本が先に来ていて何やら穴を掘っていた。

一生懸命穴掘りに没頭している月本に声をかけた。

『何してるの』　と、大方予想していた答えが返って来た。

『チョコの墓…いっぱい残ったドックフードも一緒埋めようかと思ってる』

月本の話を聞いた私は思い付いて河川敷から歩き出す。

私が用を済ませて帰ってきた時には穴を掘り終えた月本が座っていた。

私が帰ってきた事に気付くと、

『お帰り。今からチョコ埋めるから、手伝って…』

返事をすると月本がチョコを抱き上げて穴にそっと置いた。

その隣に月本がドックフードを置いた。

月本が土を被せようとした時、私がそれを止めた。

『ちょっと待って』と行ってさっき買いにいっていた物を取り出す。

そして月本が置いたドックフードの横に添えた。

チョコの大好きな缶詰。

『もういいよ』と待ってくれた月本に言って

私自身も穴の中に入ったチョコに土を被せていった。

意外とすんなりと終わったそれは、味気ないものだった。

『月本、これまで一緒にチョコの世話してくれて本当にありがとう。私はもう帰るから』

私が月本にそう告げたのを最後に、彼とは一度も顔を合わせていない。

―私はチョコに恋してたんだね。

だって君の傷ついた姿を見た日は眠れなかった。

元気な日には喜びで胸が弾んだ。

今更気付くなんて遅いって分かってる。

私は［失う］ということに何度も悲しみを覚えてしまう。　そして多分これからも。

お祖父ちゃんが死んだとき、あれだけ「もう感情は捨てよう」と思ったのに。

もしかしたら人間自体辛い感情に慣れることなんてできないのかもしれない。

幸せなことは、いとも簡単に当然になってしまうのに…。

きっと以前の私は、悲しみや苦しみから逃げて

その時感じていた気持ちを無視して「何も感じない」と高をくくっていたのだろう。

でも今なら素直に受け止めれる気がする。　自分のなかの感情を。

私をこんなふうに変えてくれたのもチョコ、君だよ。

大切に大切に、もっと大事に君といる時間を過ごせばよかった。

そして私はこれからの目標ができた。それは「生きる目的を探すこと」。

私は前々から、生きる意味を知りたがっていた。

でも、それは一人一人違う。

私はこの一度限りの人生でそれを見つける為に生きていこうと思う。

もしかしたらそれは私が死ぬまでに見つけられないかもしれないけど、

私は探すことに意味があると信じてる。

チョコ。君や未だ私に無関心な家族、月本や学校のクラスメート達、

私がいつも当前のように接してきた人やもの達は全然当たり前なんかじゃなかった。

その「当たり前」の中に居たはずの君がいない今、私は悲しみでいっぱいなんだよ。

きっと皆気付いてないだけで失ったら苦しむものがたくさんある。

だから、この［当たり前のように見える］現実の中で自分自身の大切な、

必要なものや人々を見落とさずに大切にして生きて行きたい。

これも君を失って気付けたこと。

今のこの気持ちをいつか忘れて過去を繰り返してしまいそうで怖い。

私のまだ短い人生のなかで大きな光を放って照らしてくれた

君を思うと、また弱さが出てきてしまいそうだよ。

君がいなくなり、私の心は明かりが消えかかっているけど

いつかその光は自分の力で取り戻すから。

私は、また泣いてる。

君の事を思うと、どうしても目頭が熱くなってしまうんだ。

そしてこの涙一粒一粒にチョコへの思いが詰まってる。

この涙がやがて風になって君に届くといいな…。

『チョコ、聞こえてる？　私は今、君を思ってる』

第十九話：思い（後書き）

長い間お付き合い頂いて本当にありがとうございました。
これで終わりとなります。
なかなか伝えたいことを文章にできない自分の無力さを悔やんでいます。
なにはともあれ、本当にお疲れさまでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3893a/

必要なもの

2011年2月3日12時04分発行